

午前七時過ぎ次郎は目覚めた、どんよりとした空模様だが雨は降っていない。ケンジは遅くまで、マキとカナとで飲んでいたのか爆睡中、起きる気配はない。ドアホンが鳴った、同じしてドンドンとドアを叩く音、

「そんなに叩かなくても起きているよ」

と言いながらドアを開けた。

「朝飯食べに行こうよ」

とマキにカナが突っ立っていた。

「うん行こう、だけどケンジが寝ているんだが」

と次郎が言い終わらん内にマキが、布団の上に乗っかって起きろ起きろと、ケンジは目を擦りながら上半身を起こした。

「朝飯食べに行こう、腹ペコペコだ早く着替えて」

と今度はカナが言った。バイキング形式朝飯だ、ご飯食とパン食とに成っていた。四人は適度にとりテーブル席へ、ケンジが頻りと頭をグルグルしている、次郎が言った。

「昨夜は何時まで飲んでいたんだい」

「ブブー昨夜じゃーなくて今朝です」

とマキが、次郎はウツと発し、無言でパン食に手を付け始めた。男のケンジは兎も角、女性陣の食欲旺盛な事と独り言。皆が、コーヒーを飲み始めた頃、次郎は今日の予定を告げた。

「サンフラワーは午後一時三十分に苫小牧に着く、そこから道央道で千歳恵庭ICへ、北海道横断道に入り阿寒ICを経てR240で釧路に入る、295Km四時間三十分を予定している。休憩は任せるその都度入ればいい、途

中に釧路丹頂公園がある。寄ってみてもいい。明日もあるが釧路市の幣舞橋からの眺望は、世界一と聞く、夕陽に間に合えば行ってもいい。宿泊は幣舞橋近くのWホテルを予約してある。北海道は梅雨がないと聞く、今までの様な、どんよりとした梅雨空ではなく、お天気お姉さんが言うには、今日は快晴だそうだ。余計なお世話かな、必要以上に露出した服装は日焼けに注意、以上、質問は」

「日焼けは自分達と友達です、それよりも釧路空港のGA、日葵さんの合流は」

ヒマリちゃんが午後七時に仕事が終わる、八時に末広町の居酒屋あけぼので落ち合う事にしてある。

「うつひゃー居酒屋で」

マキは手を叩き喜んだ。

「彼女とは遊びではない、重要な任務がある」

と次郎はマキにきつく言う。

「一時過ぎごろ、下船の案内放送がある、それまで自由行動だ」

と言いつつ次郎はコーヒーをお代わりした。

BMWとミニクーパーは、北海道横断道をギラつく太陽と共に、釧路に向けて快適に走っている。四時頃釧路市丹頂自然公園に到着。飼育されているタンチョウズルさんと対面、皆は飼育されているとは言え、タンチョウズルさんとは初対面、童心に帰ったかのように大はしゃぎ。マキが怪訝そうに次郎に聞いた。

「日が傾きかけたせいかもしれんが、涼しいと言うか寒さを感じるんだが、

風邪気味なのかな」

「ほほーカナもそのバージョンじゃー、寒いよな、この先もっと寒いよ、ジャンパー用意しとく様に」

「平地だし次郎、寒くなれとでも念じたんだろう」

そんな事はせんよとコーヒーを友に、次郎の講義が始まった。

「釧路市沿岸にはオホーツク海流が入り込んでいる、南風が吹くと、表面の冷たい空気を釧路市に、運んでくる。海拔427mの阿寒湖よりも寒い、5度は低そうだ。札幌市よりも7、8度低いと聞いている。市内の居酒屋さんでは夏でも、一人用のコンロ料理もあるとか」

「だから寒いのか、風邪ひいたかと心配しっちゃった」

「カーナビはセットしてけよ、サアー出よう」

と次郎は皆を促した。

「釧路市内に入ったら釧路駅を目指し、幣舞橋を目指せ、橋手前辺りで左折、そこが末広町だ、あとはWホテルを目指せばいい、居酒屋あけぼのは、そっから徒歩5分と言っていた、では出発しよう」

スカジャンは着ているが、BMWのサイドカーに、素足丸出しのチョー短パંバージョンの、うら若き女性が二人乗車している、人々の注目の的だ。マキとカナはそれなりに対応はしている。カーナビが案内する様、カナはBMWを操り、七時チョイ前にWホテルに着いた。次郎達はシャワーを浴び着替える、無論マキとカナは、はち切れん様なミニに、深く抉れたVネックのノースリーブ、慣れた次郎とは言え無言で、居酒屋あけぼのを目指した。マキが格子造りの引き戸を開いた。キョロつていると奥のテーブルで、今風な女性が

手を振っている。

あの娘かなと次郎が言った。そうじゃない、二十四歳だしあの今風バージョンは、きつとそうよ、その方向に皆は歩を進めた、

「ようこそ釧路に、私は稲垣日葵（ひまり）、叔父が大変お世話になっています。ひまりと読んで下さい」

「次郎は知ってるね自分等はマキにカナ」

「俺は健次郎、ケンジで頼む」

自己紹介が終わると、ひまりが喋り始めようとした。次郎は待てと言って、かすり着の女性を呼んだ。

「皆、飲み物は何にする」

実権はマキが握っている。

「焼酎でいいよね、決まりね」

マキはかすり着の女性に告げた、それとつまみは、魚介類のお決まりコースでお願い」

「小生等はそれでいいけど、ひまりちゃんはどうする」

「私もそれでいいです、出来れば焼酎の銘柄は、ジャガイモ焼酎、喜多里でお願いします、素朴でやさしい味と風味が特徴です」

と、ひまりが言った。一同はキョトンとし、顔を合わせ拍手が起きた。

「始めまして私が作りましょう」コップに氷をカラッと落とす、焼酎を適量づつ注いだ。

「次郎さん乾杯です」

といきなり言われた次郎はたじろむ、気を取り直してカンパイ。

「ひまり、チームいづくのメンバーは知っているよな、メンバーにひまりを紹介しておく、補足があれば後で言ってくれ、府中署交通課の稲垣巡査長は、皆知っている、彼の姪っ子さんで、釧路空港でGAをやっている。そして大の推理小説ファンでもあり、十津川警部の大ファンと聞いている。去年は実際に新幹線と在来線に乗り、時間トリックに挑戦した、夜行列車トリックに挑戦したいんだが、残念な事に今は廃止路線が、未だ挑戦できていない。今回、こうして同行をお願いしたのは、重要人物の村井瑠璃子に遭遇し、証拠品を押収した。薬物を包んでいただろうその紙の押収、本人の唾液、釧路にいて毒殺に関与したとの証拠品、薬物売買の関与が明らかになった。

「ひまり、付け加えることはない」

次郎はひまりに向き直った。

「村井瑠璃子の証拠品と関連づける、本人の物に相違無しと確信している。又、搭乗時香水の強い匂いは、彼女独特と言える。先程の東京からの最終便で、その匂いがした。行き過ぎてから匂いに気が付いたんで、はっきりと説明できないが、後ろ容姿では村井瑠璃子似の様だった」

次郎の黒目が更に大きくなった。

「じゃー毒殺魔がこの釧路に来ていると言うのか」

「確信は言えないが、匂いと後ろの容姿から、村井瑠璃子ではないのか」「もし、本人であれば何用で、釧路に来ているのか、小生等の後をつけていたのか、そうだとしたら小生の不覚としか言いようがない」

「次郎、そんなに自分を責めちゃー遺憾よ」

マキとカナが言う。

「本人かどうか確かめよう、どうやって確かめんのか、皆の視線は次郎に集まった。」

「次郎だ暫くだな、変わりはないか」

「秘書室はここん所、平穩その者です。以前のようにおっかない様な、お方様の来訪もなくなり、室長もやたら起こらなくなりました」

「それは何故分かる」

「分かんない、あつそれから、室長さんは一昨日から一週間、休暇を取っています、あまり休暇は取らないんだが珍しい、それから休暇と言えば、私達が北海道旅行と同じ日に、何処に行ったかは不明だが、一週間休暇を取っています。これって役に立ちます」

「大いに役立つ、ありがとう」

「じつ次郎ちよつと待ってよ、ア리가十つ匹何て言うんじゃーないよね」

「今北海道だ、東京に帰ったら、レミーマルタンの店でいいよな」

「OK、だから好きよ、じゃー東京に帰ってからね」

で次郎はスマートフォンを切った。レミーマルタンの店って何よ、マキは口を尖んがらした。

「相分かった、東京へ戻ったら、皆で行こう」

マキはやったーとばかりに、グラスをカチンさせた。

「理沙が言うには、ここんところ室長は休んでいると言う、ひまりが言う人物は、村井瑠璃子の様だ。では、何しに来たかだ」

ルパン三世が喚いた。ガキさんからだ、こんばんわと次郎は出た。

「どうだい次郎さん、姪っ子は役に立っているかへ」

「大助かりだ、重要案件も提供してくれた」

「そうかそれは良かった、ジャンジャン使ってくれ。それと次郎さん、気になる事があるんだ伝えておく、まりさんが言うには、いっぷくの閉店後不審者が、うろついていると連絡が入った。何でも一晩中らしい、いざとなったら男一人、まりさんは、なんて事ないだろうが、以前男三人に襲われた事を思い出した。調布署に連絡を入れると共に、昨晚からいっぷくで、次郎さんが帰ってくるまで、寝泊まりする事にした。次郎さん良いだろう」「良いも悪いもない、宜しくお願いする。こっちも誰かにつけられている、用心せねばと皆に行った所だ」

「次郎さん頼むぜ、全員息災で返ってくるように」

「相分かった、まりの件は頼む」

と言いスマホを切った。

「いっぷくは不審者がうろついているようだが、ガキさんにガッチリガードしてもらっている、まりも一安心だ。こっちは何が起きるか分からん、現時点では起きても不思議ではない、どんな事でもいい、気になったら連絡を取り合うように。ひまりも同行、明日は元薬物売人の大里麻衣の、毒殺されるまでの、一日を辿ってみる。ひまりも同行する、幣舞橋公園より摩周湖から屈沙羅湖、阿寒湖を経て釧路空港駐車場までを実踏してみる。皆もその都度如才ない意見を言ってくれ」

皆は首を上下に振った。

「マキにカナ、料理も喜多里も残っている、食べそこなった、飲みそこなっ

たと後で言わんように、しつかり食べて飲んで」

その一言を待っていたのか、ペースが上がり、追加と相成った。次郎は喜多里を何杯か飲んで言った。

「じゃー皆、明日は宜しくお願いする。ケンジはまだ飲むか、小生はここいら辺で上りとす、どうする」

「次郎さん、あっしもあがりや、このままいたら女性陣に殺されてしまう、上がります」

ケンジをそう言つて、次郎に続きで立ち上がった。

「お三人方、旨いからと言って、いくら飲んでも構わんが、明日の事を忘れるように」

三人はハモったようにハーイ。

「ねー、マキさんにカナさん、次郎さんどうしたの、まだ途中だと言うのに」

「ご心配には及びません、次郎はいつも二時間経つと、いつも引き上げてしまい、後はご自由にと言つて消える。なんの心配はいらないよ」

「そうか、良かった私、何かやらかしてしまつたのかと心配してしまつた」

さー、飲もう三人は何回目かのカンパイをした。次郎とケンジはシャワーを浴び、寛いでいた。テーブルに無造作に置いてあるスマホから、ルパン三世が喚いた。ガンさんからだ、いっぷくに何か起こつたか、次郎は緊張した。

「次郎さん、寛いでいる所をすまん」

「ガンさん、俺との仲じゃーないか、いつもの様に行こうぜ、で何用」

「率直に話せて頂く、明日の捜査は姪っ子が同行する、と以前から聞いていたんだがーと次郎さん」

「ガキさんらしくないよな、ズバツと言ったら」

「今、姪っ子から電話が入り、食事をご馳走になっていると、まーここまで叔父の俺としても、黙認せざるを得ないんだが、どうだい次郎さん、旅費は十分とは言えんが用意した、道東を始め道央、道南、八戸まで同行させてはくれまいか、姪っ子の夢と言うか、もう女十津川警部になりきっている、俺にはどうする事は出来ん、後は次郎さん次第だ」

「一緒に捜査したい、と言うならば構わんよ、旅費はそのまま銀行に入れて置くように、そんでリスク多大だ、要は危険と隣り合わせと言っても過言でない。それを弁え、チームの秩序を乱さなければ、同行しても構わんよ」

「次郎さん、ありがとう早速ひまりに言っとく」

翌朝、幣舞橋のたもとの公園に、BMWとミニクーパーが停車している。ひまりは次郎達に、朝の挨拶と八戸までの捜査同行の挨拶をした。BMWとミニに分乗し、幣舞橋公園脇を出発。ひまりはミニに乘せ、BMWはカナが操縦士し、マキはパッセンジャーシート、二人はジャンパーは羽織っているが、中身はチョー二人用バージョン。釧路市内を抜け、R391に入る、どうやら湿原地帯へ入った。釧路本線と並行す、塘路（とうろ）サルルン展望台に寄った。湿原の先に地平線が見える、湿原と名が付くは山とあるが、ここは違う、遠くは湾曲しているでっかい湿原だ。微かに白い物が、ひまりがタンチョウズルと言う。皆で缶コーヒーで暫し、その雄大さにしたる。更にR391号線を北上した。ひまりが弟子屈（でしかが）町に入った所で言っ

た。

「次の信号を左折し52号線に入って」

とまた言った。大相撲記念館と記された建物があり、その前に力士の銅像が立っている。更にひまりはいう。

「ねー次郎さん、ケンジさん」

と言い出した。平成の大横綱、大鵬さんを知っているよね」

「ああ知ってるとも昭和の大横綱だ」

「ここ川上郡弟子屈町は、その大鵬さんの出身地です。どんな手を使ってでも、勝てば良いと言う力士がいるが、大鵬さんはそうではなかった、格下力士には、如何っからでもかかってきなさい。そう言っただけなら構えて、相手が動き出すのを待っていた。それでも32回の優勝誇った」

「小生も応援していた、強かったよなー、45連勝もあったと記憶している」

そうこうミニ内でしゃべっていたら、何時しか摩周湖第一駐車場着、女性陣はすかさず、大里麻衣と村井瑠璃子の写真を以て売店へ聞き込み、結果は皆無だ。摩周湖を見下ろす休憩所へ行く、

「ひまりが喋った、霧の摩周湖って知っている」

と、カナが返した。

「自分が小さい頃母が聞いていた。幼心に覚えている」

「当時はドーナツ版と言って、小さなレコード盤で、中央に大きな孔が開いていた。それを販売する為に、ビニール袋とジャケットが必要、そのジャケット撮影はここで行われた。布施明さんと呼んでの撮影だ、だけど大きな問題が起きたてしまった、霧の摩周湖なのに霧が出ない。撮影は来る日も来る日も、ダメだ。皆は時間切れを考えていた、スタッフの一人が言った。ドラ

イアイスを使おう。ジャケット撮影で、そんな事があつたと聞いている」

「あら、あのジャケット、ドライアイス仕様なの」

マキがボソボソつと言った。

「そうだねジャケット撮影も苦勞が多いね、何の曲だったかなあつそうだ、水森かおりの新曲ジャケット撮影で、場違いな所で撮影したと言っていた。

現地で撮影が一番だが身近で、そのような場所があれば即使用と、関係者は言っていた」

皆、おーつとした表情、口数少ないケンジが言った。

ひまりが口を開いた。

「明治時代ロシア南下に抵抗する為、明治政府は旭川、網走間の中央道路が必要とし、建設を始めるが労働力が不足、それを補う為に網走刑務所の囚人でうめた。この摩周湖周辺道もその囚人達が従事されたとされる、そんな風に私は聞いています」

「ひまり、小生の分からん歴史をありがとう、この先もあつたらその都度お願いする」

次郎はそう言って皆を促し、屈沙羅湖を目指した。駐車場を出て下りの十九折れが始まった、リアシートで窮屈そうにしていた次郎が言った。

「後ろの車、何か可笑しい、着いたり離れたりしている」

「次郎さんもそう想うます、俺は九十九折れのせいかと思っていたが」

途端に対向車など気にせず、無理やりミニを追い越した。

「同乗者はいない、運転手一人の様だ」

「でも、次郎さん可笑しいよ、やけにBMWにくっ付いている、右に左によ

たつき始めた、今にもぶつかりそうだ」

「明らかにBMWに悪戯している、県警に連絡を入れよう」

と次郎は言い、スマホをプッシュした。次はマキに、

「良いかよく聞け、クロヒョウのハンドリングは間違いない、小生はそう想っているが、他車に危害を及ぼしかねない、そのまま屈沙羅湖に突っ込め」

「突っ込んだらBMWはお釈迦になっちゃう、次郎いいの」「アホンダラ、小生と何年付き合っているんだ、小生が何を考えているのか分からんのか」・・・「黙っている時間はない」

「御免、水際でフルターンすればいいんだね」

「そうだ、何故それが早く出なかったんだ、アツ時間がない即実行」

BMWは国道から水辺に通じる砂地を、フルスロットルで突き進む、不審車も砂を巻き上げ後を追う。ここは観光地でもあるし人も多い、水際を掘れば暖かい水が温泉が出てくる。ここかしこで手で砂を掘り、楽しんでいる。

そこへBMWとセダンが突っ込んで来た、皆大騒ぎだ。次郎は道路わきにミニを止め、成り行きを見守った。観衆は湖に突っ込んだじゃうと口々に、悲鳴も混ざった。水際でBMWはフル回転、追って来たセダンはそのまま屈沙羅湖へドボン、半分、水に浸かった車から降りて来た、ドライバーは俺の車を台無しにしゃがって、この野郎と怒り心頭だ。

「ばっか言ってんじゃーないよ、責任転嫁も甚だしい、自分で勝手にドボンしたのに」

カナのその声に怒りが爆発した、カナに拳を振り上げた。

「カナよけろ」

マキが叫ぶ、男の拳が空を切りバランスを崩す。

「カナ、執行猶予中だ、後は自分に任せろ」

と男の前に立ち塞がった。2メートルに成らんとする大男相手だ、ミニの中でマキさんがやられちゃう、次郎さんケンジさん何とかしてよ、それともあの大男を見て怖気づいたの」

ひまりは必死で言う。

「ひまり、小生に何と言おうが、何と言われようが構わん、静観しててくれ」

とひまりは言われオドオドするばかり。男の鉄拳がマキの左に、その手を掴んだマキは、右足を跳ね上げ男の首に回した、体を屈め左手をとった。

マキを肩に乗つけたような恰好だ、マキが、両腕を力任せに締め上げた。男は堪え切れんか、ううーっと声を発しうつ伏せに倒れた。マキの十字固めは決まった。ミニの中ではひまりが呆然とし強っえーと、皆はBMWの傍に寄った。次郎が、男の頬をヒタヒタとし聞いた。

「誰に頼まれ我々に嫌がらせをした」

男は躊躇するもマキが締め上げた。

「分かった言う、緩めてくれ」

「じゃー聞かせて頂こうか」

今度はマキが言った。

「昨日、飛行場で女を物色していたら、アラフォーと思しき、モデルの様な女が近づいて来た、香水はきつめだ。カモが寄って来たと微笑んだ、だけどころが可笑しい、歩くにしても辺りをキョロ付き、遠回りする様だった。人

目の少ない椅子に腰掛、自己紹介を話し始めた。飯野日々子と言っていた、俺は増田勇作、ナンパ中と答えた。そんなのは私にはどうでもいい事、頼んだ仕事を確実に遂行してくれたら、私と20万円を差し上げます、如何悪くないでしょ、やってくれるの、即やろうと言って来た」

「それが今回って言う訳か、しくじっちゃー金も体もなしっていう訳ね」
「いや、取っつきって言うか10万円は頂いたよ」

「そうか、ゼロじゃーなくてよかったね」

カナが根掘り葉掘り聞き、答えさせた。

要約次郎の通報でパトカーが到着、屈沙羅湖の観光客は、時ならぬ女性の捕り物騒ぎに、大喜びの様だ。ひまりは西村京太郎さんも、どつきりな展開になって来たと、次郎に分からん様に、ボソボソつと言った。次郎は今までの経緯を、警察官に説明する。

「では、何方でもいいんで、ここに住所と名前を記して下さい」

警察官は形式的に質問をした。次郎は躊躇はしたが、東京都調布市・・・谷端次郎と記した。それを見たパトカーの二人の警察官は、顔を見合わせ「もしやあなた様は」

と聞いて来た。次郎はいつもの様に頭を掻き

「そうです谷端です」

と控えめに答えた。警察官は取敢えず敬礼をした。

「谷端さん達が釧路に来ていると、釧路署の一課長から聞いてはいましたが、ここでお会い出来るとは思いませんでした。で、ここの処理はどういたしましたでしょうか」

「襲撃未遂事件として処理が、妥当だと思われる。自分達には先があるし、それ以上は望みません」

次郎さん、分かった、しかし署としては、現場検証及び調書作成せねばならぬ、増田勇作を二、三日泊める予定だが」

「それは構わぬ、自分達は先を急ぐ故、このまま行くが、後はお任せします」

釧路署員に敬礼し屈沙羅湖を後にする。弟子屈町に戻ってR241を進んだ、途中双湖台に寄り、阿寒湖の眺望を楽しむ。阿寒湖温泉の駐車場に入った。昼時だー食事処を探した。ソバ処奈辺久さんを見つけた、カウンター席とテーブル席があり、こじんまりとしている。年齢不明なお嬢さんに、

「手前味噌は」と訪ねた。

すかさずワカサギの、唐揚げソバと返って来た。

「それ、五人前お願いします」

とマキが言った。

カナとひまりは、お忙しいところ恐縮ですがと言い、大里麻衣と村井瑠璃子の写真を、先程のお嬢さんに見せた。

「この二人ご存じありませんか」

と訪ねた。三月に二人で阿寒湖に来たと想うのですが、ご存じないでしょうか」

と年齢不明なお嬢さんに聞いてみた。眼を落とし暫く考え込むような仕草、ややあつて、

「来ましたよ、一人はサングラスしとったが間違いなく、この二人です。サ

ングラスの方は手袋をしていました、食べる時も手袋を外さなかった。せめて食べる時位は、とつたらと想っていたんです。そんなに良く覚えています」

「それ以外に何か気づいた事はありませんか」

「つばひろの帽子を脱がなかった、これも食べる時位は取つたらと、思っていました。所であんさん達は刑事さんかへ」

「いや、文屋です」

とマキは週刊平成の名刺を出した。

「ほー文屋さんかへ、何を調べているんですか」

次郎が喋った。

「空港駐車場で、毒殺された女性を調べています。今は申し訳ないが、これ以上はお話しできません。申し訳ございませんが、他に何か起きづきの事があれば、ここに電話を入れて下さい」

次郎も週刊平成の名刺を出した。

「いい男が二人、別嬪さんが三人だもん、協力しない訳がない、いい情報があつたら直ぐ電話するよ、おまちー、ワカサギの唐揚げソバが出来たよ」

年齢不明なお嬢さんは、ソバを配った。皆の眼が丸くなった、ワカサギの唐揚げの量の多い事、東京で食べる量の、優に倍いや三倍は或るんじゃないかと、皆口々に言った。年齢不明なお嬢さんに、ご馳走さんつと言い、

「新たな情報があつたら連絡をお願いします」

と言ひソバ処を後にする。

女性陣の申しで、土産物店をブラブラする事と相成った。クマやフクロウの木彫りが多い、女性陣は、キーホルダーやストラップを、あれやこれやと

騒いでいる。小生もまり様に、クマとフクロウのストラップを購入、皆もそなりに購入した。腹も収まり土産も買った、誰とはなしに駐車場方向へ足が向いた。R240を釧路空港目指して進む、空港に午後二時半に着いた。駐車場にBMWとミニを止め次郎は言った。

「ここで大里麻衣と村井瑠璃子は、如何に行動したか辿ってみよう。阿寒湖から降りてきた二人は、防犯カメラに映らん様、ここに止めた」

「次郎さん、車は映っても人物は死角、要は誰が乗っているかは分かんない、人物がカメラに映らない様に駐車場に入り、ここに止めるのはそんなに難しい事ではない、やってみよう」と

とカナが言った。

「ゲートを抜け、建物寄りに車を止める。ここならカメラの下になり、足元の車は写らん、他にカメラはある、あそことあそこにこっちにも、だけど運転手は写っても、助手席は写らない。向こうのカメラは写っても、遠すぎてザラついて詳細に欠ける。今の道順なら、例え写っていたとしても、助手席の人物を特定するのは無理、そんな訳二人の車はここに停めた。

「どう、次郎自分の推理は」

「カナ、ピンポンだよん、自分もそう思うよ」

マキは言う。次郎とケンジは、声は出さんがウンウンと言った表情、ひまりは静観している。

「寒くなってきた、中に入り、温かいコーヒーでも飲もう、そこで重役会議だ」

と次郎は言った。

「じゃー私が案内する付いて来て」

言われるまま、ひまりに付いて行く。

「ここよ適当に座って、スタッフが、

「ひまりちゃん、どうしたの制服は、今日はオフなの」

「今日は十津川警部の助手をやっています。厨房借りるね、今コーヒ―淹れてくるね」

勝手知ったる店、ひまりは厨房に入った。

「皆、さっきのカナの推理、どう思う」

少しあって、珍しくケンジが言い出した。

「俺はカナさんの推理賛成、他に何か方法があるかなと、俺には浮かばん、そんな訳でカナさん論に賛成」

「十津川警部の助手さんとやら、言いたい事があるような顔をしている、もう、チームいっぽくの一員だ、喋りたい事があるんなら、遠慮なく言ってくれ」

「はい、ありがとうございます。では話させて頂きます。次郎さんは何か、取って置きの推理があるのでは、あつたら教えて、自分はカナさんの推理が妥当と想われます」

次郎は頭を掻きながら言い出した。

「別にこれと言って方法はない。さっきはカナが余りにも、適格な推理を得たんで、小生は面食らった。

「小生抜きでもと想っておった」

「次郎そりや無理だ」

とマキとカナがハモった。

「小生をまだ必要とすかな」

「次郎、冗談が冗談でなくなるよ、その話はよそうよ」

マキが言ったと同じして、ひまりがセットしておいた、コーヒーが、

「おまちどー」と運ばれて来た。

「ねー次郎さん、皆も聞いてここの店が、村井瑠璃子が三月二十八日の夜寄った店です」

とひまりが言う、

「香水を撒き散らし、煙草を吸い、ティッシュで口元を拭いた。おまけに薬物の包み紙を1枚、それらをまとめて備え付けの灰皿に捨てた。釧路署に提出したら、村井瑠璃子のものと一致した」

ひまりは淡々と話す。次郎達は他に寄って薬物を捨て、毒薬を捨てたと想われるトイレに寄る。傍に空きビンとカンの置き場があり、ゴミ入れも置いてあった。ここに捨てれば、何ら証拠は残らず問題はない、村井瑠璃子は毒殺や薬物所持の疑いはない、大手を振ってナイト便に搭乗した。

釧路湾で夕焼けが始まる時間まで、後二時間だ、幣舞橋に行こう。ひまりの誘導で、難なく幣舞橋手前、船溜まり脇駐車場に次郎達は止めた。既に、幣舞橋歩道にはその時を待つ人人……。後十五分程で始まると、誰とはなしに伝わった。ひまりは何度見ても良いと、マキとカナに言い、欄干に両肘を寄せ遠方を見据えた。だけど次郎の心配事と言うかシナリオ通りと言うか、始まってしまった。

アマチュアカメラマンに誘われるまま、マキとカナはポーズを取り始めた。

今回は、ひまりまでもが二人に負けじと、夕焼けをバックにとっている。

「ありがとうございました」

と言い、アマチュアカメラマンが去った時には、夕焼けシヨウは終わっていた。三人はもう、終わったのとしょんぼり、

「その瞬間を見損なってしまった」

と口々に言った。

「小生だって、夕陽は、落ち着て見てはいられなかった」

と次郎が言うと言きが尚も言う。

「自分達だって落ち着いて、夕陽は見られなかった。何故かって言うと、とつかえひつかえ男がカメラを向け、ポーズを要求する、デートを迫って来るんだもん、落ち着て夕陽なんぞ見られたもんじゃない」

と言きが言うと、

「男の一人や二人に襲われたって、怯むマキとカナではないが、大勢の男が近づく、刃物でも持っていて、不意を突かれたらどうするんだ、ましてや尻だしパンツに、必要以上に露出したシャツ、人の気持ちも知らないで」

と次郎はボソボソと言い、ケンジを見た。ウンウンとしケンジも同様の考えのようだ。

「夕焼け見物は残念な結果だったが、何時までも引きづってはならぬ、釧路はやはり寒い、温かいもんを食べに行こう、温かいもんを飲みに行こう。ひまり、ひいきの店を案内しろ」

ハイとひまりは言って先を歩いた。着いた所は昨夜と違い、煙ムンムンの場所だ。ひまりが言うのには、生ものはなく焼き魚オンリーの店です」

で、飲み物と肴はと次郎が聞いた。

「次郎さん、お酒は昨日の喜多里でいいね、肴は冷凍なんだけど、秋が旬のシシヤモでいいよね」

「いいけどシシヤモは東京でも多く食べられるよ、ここ産はないの」

「これだから東京人は困るよ」

「困るってどうして、以前函館で柳葉魚を頂き食べた事はある」

と次郎言った。ひまりはおかんむり気味。

「シシヤモとは柳葉魚と書きます。普段店頭で見かけるシシヤモは、カペリンと言ってカラフトシシヤモの事、腹に沢山卵を抱えたシシヤモです、ここで言うシシヤモ（柳葉魚）はそれとは別物、北海道でも太平洋岸に生息する日本の固有魚、鱗と口、目が大きく、卵を持たないオスが旨いと言う。次郎さん、これでお分かり」

「はい、分かり申した。それと他に焼き物を注文しといて」

ひまりは品書きに目を通し、仲居さんに、これとこれをお願いしますと口早に頼んだ。次郎はアルコールが入らん内に、今日の反省はあるかと皆に振った。

「反省ではないんだが、屈沙羅湖までのBMWと不審車とのバトルだったし、マキさんのすつばらしい技の数々、最初はビクついていたが、終わってみればかっこいいで終わった。女の私でも惚れ惚れしちゃう、あーゆーふうーに、出来るようになるにはどうすればいいの、教えて」

少しあって次郎が喋った。

「マキやカナは、いきなりあのような運転が出来、あのような技が出来るよ

うになったのではない。日々の厳しい練習の成果だ、一日や二日、練習したって到底無理、十年早い」

次郎にそう言われ、ひまりはしゅんとした。お待ちどう様と、コップと喜多里と柳葉魚が、ひまりの前のテーブルに載った。

「ひまりちゃん、焼酎を飲み易いように作って、柳葉魚は火加減宜しく焼いてね」

カナにそう言われ元に戻ったか、

「ハ―イ」と言いつた。

カチャカチャと音を立て、人数分の飲み物を用意する。

「反省もないようだな、カンパイと行こうか、あいや待たれ、明日の予定を言っておく、9時に、釧路捜査一課の大滝警部と浅田巡査長に会い、今迄の情報交換と、今後の方針を確認予定だ。昼はひまりに頼んで昼食会を、マキとカナを見て、ひまりがお前ら服装が気に入ったようだ、買い物に付き合っってやってくれ、修了次第次へ出発する。それとマキとカナに言っても無駄だと想うが、服装を」

「はい、言っても無駄です、警察への取材は一般の方と違い次郎の親戚の様な所、敢てめかして行く必要はありません。平服でお邪魔させて頂きます」

マキの言に次郎は啞然とすると言うか、タジタジだ、相分かったカンパイしよう、今宵のカンパイはケンジに頼むと言った。

翌日BMWとミニは、釧路署の門を抜け玄関へ、杖突警官がこらそこはダメだと言う、カナが説明するも警官はらちが明かない。そーこーしていると、恰幅のいい刑事さんが出て来た。サイドカーに、必要以上に肌を露出した女

性二人を見て、一言二言。

「後ろの車は次郎さん達ですね」

「はい、そうです」

「あの白線に沿って止めて下さい」

と言う。恰幅いい刑事さんは大滝警部だった、ひまりも早々、いつぷくバージョンに着替えてあった。大滝警部さんもだが、三人の今風でしかも、肌を露出した女性が降りて来た。否応なしに大滝警部も、杖突警官も動揺は隠せなかった。五人は応接室に通される。ソファ―に座った女性三人、大滝警部と浅田巡査長は視線に困っていた。気づいた次郎は言った。

「パイプ椅子があるような、休憩室とか、食堂はないでしょうか」

と聞いた。今の時間なら何人かは居るかもしれんが、食堂が空いています」

「パイプ椅子で構いません、そちらで情報交換いたしましょう」

次郎達は立ち上がり大滝警部の後を追った。

「ここならひざ元も、見えんし話しやすい」

女性陣に気づかれん様、男衆は苦笑い。

「出てくる時に言ったんだが、聞き入れてくれん」

「次郎さんにも自由が聞かん事もあるんですね」

「しょっちゅうです」

女性陣が次郎をキツと睨んだ。察したか大滝警部が言った。

「鬼の警部さんにも、事情があるようですな、早速情報交換と行きましょう。昨日の屈沙羅湖の車両による追撃事件犯は、増田勇作でナンパ中、報告はダブルと思うかもしれんが一通り話す。香水はきつくモデル風な女性だった。

アラフォーと言う。かかったと言うか俺がかかったようだ、ある車を脅して欲しいと言って来た、殺人をしろとは言わない、脅し恐怖を与えてくれれば良い、ただそれだけ、成功したら20万円と私を一晩あげる。ここまで私は喋ってしまった、増田勇作さん、後戻りは出来ないよ、手付金の10万ですと言って、俺の手に10万円が、そんな訳でBMWを後ろから、突っつき始めた」

「今は増田勇作は如何している」

「未だ取り調べ中です、今晚もう一日泊まてもらいます」

「増田はしくじったも同然、今度は遣られる可能性はどうだろう。その可能性は、なきにしもあれです」

「十分あり得る、玄関出た所でズドンなんって」

「次郎さんもご存じのごとく、これ以上の勾留は無理」

はい、その通りと言って次郎は、

「そのモデル風な女性は飯野日々子と名乗っていたが、小生等の調べでは村井瑠璃子は、一昨日から地検を休んでいる。襲撃者増田勇作と会い、襲撃を依頼した人物と似ている、等々小生等は村井瑠璃子と同定してる」

「又、村井瑠璃子は薬物売買にも関係する。事実捨てた紙から薬物反応が出ている、釧路空港駐車場で毒殺された主婦は、売人と判明している。その主婦と当日、阿寒湖方面へ観光旅行をした。行った先々で本人と想われる人物とが確認されている。逮捕状を取り逮捕もあるが物証に乏しいし、相手は東都地検だ、

容易にはいくまい」

「で、次郎さんとしては如何致す」

「中堀を埋めにかかる、それはこれから行く道央、道南、八戸だ、釧路ともつながっている筈だ、いや筈ではない太い実線で繋がっている。ひまりも加わった、小生等チームいっぶくの調査、捜査に期待してくれ、良い報告が出来る。

「次郎さんには行った先々に女が、いや素晴らしい情報網がある、期待して待っている」

「大滝一課長さん、頼まれ毎を聞いて下さい。

「何でしよう何なりと言って下さい」

「あそこの河口じゃー分かんないよな、幣舞橋河口の船溜まり、そこを川浚いをしてみてくれ、何か出るはずだ、これは永年の勘だが」

大滝一課長はたじろいだがOKと、次郎に敬礼をした。

何時しか女三人は、婦警さん等に誘われ奥の方でYY始めた。

「次郎、婦警さん達がひまりちゃんの買い物、手伝ってくれるって、行っていくでしょ」

「構わんが、昼はどうする」

「食べてきます、次郎達は次郎達で食べて」

「大滝一課長、いつもあーだ、小生とケンジは良く、蚊帳の外に追い出される」

「次郎さん、カツ丼で良かったら、間に合わせるよ」

一課長が言ってくれた。

「2時に出れば美瑛町に、5時頃に付けるだろう。天候にもよるが、白金の

青池にも行けると想う、今日は美瑛町泊まりだ、あいつら何とかな」と、次郎は言った。

女連中が買い物から戻るまで、大滝一課長が次郎とケンジの相手をしてくれる。

「次郎さんは、野鳥撮影を楽しんでいると聞いています。近隣の山林は野鳥の宝庫です、これからの季節は道内は無論、本州や九州から多くのカメラマンが、去年つとやってきます。事件が解決したら次郎さん達も、野鳥撮影に来ては如何かな、又釧路沿岸から、羅臼辺りはオオワシとオジロワシの撮影ポイントです。羅臼には、オオワシ観察撮影クルーズもあります。奥さんを含め、チームいっぷくでいらして下さい、今回と違った道東があるかも知れません」

「そうだ、まりさんが一緒も良いな、次郎さん、まりさんは顔には出さんがいつも、行つてらっしゃいばかりじゃー、つまないと想うよ、今年の

夏はまりさんを含め皆で、北海道旅行しようよ」

いつも控えめなケンジが言った。次郎は次郎流にOKと言った。

婦警さんと女三人は、YY言いながら入つて来た。早々とひまりの、チームいっぷくバージョンのお披露目だ、マキとカナに劣らぬスーパーバージョン。

「次郎さんどう、これでチームいっぷくは合格ね、ケンジさんも宜しくね」

「次郎さんどうしたのそんなに浮かぬ顔をして」

渋い顔をしていた次郎に、大滝一課長が聞いた。

「マキとカナ二人だって、BMW止めて休憩していれば、男どもが寄ってきては、写真撮らせろと騒ぎよる。中には変わった男もいる、触らせろ

とかここに「チュ」してくれとか、その都度小生と、ケンジは、写真を撮るだけにして下さいとお願いに入る。それがこれからは三人だ、目が届かない場合も出てくるだろう、そんなこんなを想うとつい、余計な事を思ってしまう」

「昨日の幣舞橋は、人も多く大騒ぎになってしまい、整理不能に落ちてしまった。気が付けばサンセットが終わり、人々はバラケ始め要約終わった。そんなこんながあつた、次郎さんは三人になったら、如何様にすべきか思案中と想う」

とケンジが一課長に説明した。

「あれだけ容姿端麗な女性、然も肌の露出多き衣装を着用した三人、否がおう人目を誘う。どう対処すべきか、次郎さんも別な苦労も多いようですね」

控えめながら大滝一課長が言った。

「コーヒー淹れてくるからね、ゆっくり飲んで、それから出発して」
チーフらしき婦警さんは言う。

「ひまりさん、僅かな間に、すっかりチームいっぽくの一員に、変身しましたね」

一課長が言った。

「婦警さんらの協力で、いち早く変身できました。ありがとうございます」

「西村京太郎のファンで、十津川警部の助手と称している。小説に乗っ取って旅するのが好きだと言っている」

次郎が言うどひまりが補足した。

「交通機関による時間との勝負、堪ないね、だけど夜行列車が無くなり在来線と飛行機、新幹線との組み合わせも良いけど、夜行列車がなくなった今日、自分は淋しく思うし、夜行列車ではの自分流に味わいがあったと思う、残念です」

一課長はひまりが言い終わるのを待って言った。

「次郎さんは幸せですね、武術家でもあり、知識豊かなマキちゃんにカナちゃんを従い、ケンジさんもいる。はたまた今回は、推理力拔群なひまりちゃんを獲得した、羨ましいと想うのみ」

「一課長、そのへんにしといてくれないか小生、貶されるのは慣れっこやが、褒められるのはチョーが付くほど苦手、誉め言葉は終わりにして下さい」

「おっごめん、コーヒー冷めないうちに飲んで下さい」

と言って一課長はチーフ婦警さんに耳打ちす。

2時を回った、次郎はサァー出ようと言って皆を促した。

「次郎さん、ちよつと待ってと婦警さんが呼び止めた。一課長からです」と、保冷袋を差し出した。

これとは次郎が言い出した時、

「柳葉魚です、馴染みの店で用意しました。火は通してあります、休憩時にでも吟味して下さい」

キャツホー

「本場もんの柳葉魚が、ツウリング中に食べられるなって最高」

女性陣から歓声が上がった。何処か眺めのいい所でも見つけ、休憩し味わっ

てください」

「一課長さんありがとうございます、ベターなツウリングになります」と言
ってマキはパッセンジャーシートに乗り込んだ。R38を走り大毛で右折し
R240に入る、街中を抜けると直線と、適度にカーブがあり、運転好きに
は堪らん道が続く、時折リスが横切りBMWから歓声が沸く。阿寒町下舌辛
で道東自動車道に入った。直線路は続く、むかし車はクマより少な
い、そこに高速道路は必要か、そんな話を議員さんが言っておった。で
も、東京の、渋滞続きな道路に慣れきっている小生等には、車は少な
く自動車乗りには快適道路だ。帯広からトマムを過ぎ、専冠PCで小
休止、ここまではBMWに裸同然の二人に、嫌がらせははない。追い抜
きざまに、クラクションを鳴らしたり、腕をグルグル回し楽しんでいる
程度だ。ベンチに腰掛け、柳葉魚を吟味する。女性陣の食し方は、チ
ョーが着くほど速い、次郎とケンジは辛うじて1尾づつ。次郎は遠く離
れて止まった、レンタカーを眺めている。釧路を出てから、前に後ろに
なりながら、小生等の行動を探っているようだ。一人だったり二人だつ
たり同乗者数はまちまちだ、ナンバーまでは確認とれないが二台の模様。
又、その数からすると三人の模様。次郎は皆を気にしつつスマホを手
に取った。

「次郎だ、今大丈夫かなと断った」

「ダメだけど次郎ならいいよと」

理沙は言った。

「又、極秘で調べてくれないかな」

「いいよ、で何を調べんの」

「又かと言われんかもやが、村井瑠璃子の休暇を」

「いいよ、でもレミーマルタンの店、二回だよ次郎」

「理沙にあっちゃー叶わんな、無事東京に戻ったら考えよう」

「無事に帰ったらって、どう言う事、何か危険が迫っているの」

「否そうじゃない、お宅の室長さんが、北海道に来ていと思うのだが」

「行つてたら次郎困るの、困りゃーせんがちよつと、気になる事が、今宵は美瑛止まりだ、夜にも電話入れてくれ、くれぐれも他に悟られん様に」電話が終わると、真っ先にマキが聞いて来た。

「村井瑠璃子の休暇を、調べろって何なの、何かあったの」

「皆、心して聞いてくれ、向こうの端の方に駐車している、白のセダン、ナンバーは確認できていないが、釧路を出てから近寄ず、遠からずで自分等と行動を共にしている。事実こうして、小生等が休みに入ると、敵さんも休憩する。同乗者が二人と一人その都度違う、要は敵は二台ではなからうか」

で、暫くして、

「次郎は、あの車どうしようと思う」

とカナが聞く。

「何も危害が無ければ静観するしかないが、危害があってからでは遅い、その為には自衛も必要だ、車のナンバーと、乗車人物の特徴を掴んでくれ、この件に村井瑠璃子が絡んでいるかも、彼女の休暇を理沙に確認してもらっている。彼女が絡んでいるならば、大事になって来る、皆、更に気

を引き締めて、捜査するように」

「マキにカナ、いいかよく聞け、今迄同様交通ルールを守り、制限速度を守り、走行に徹すべし、それを破る時は前回の様に、小生が指示を出し身を守る時だけだ」

皆はうなづく。ひまりがもじもじしながら言った。

「諸先輩を前にして、新参者の私が言うのとお叱りを、受けるかもしれないませんが、次郎さんの話だと、何が起きても可笑しくな、そこまで来ているようです。事実、銃殺に毒殺はありました。あのレンタカーの人物達は、如何様に出てくるか、或いは何も起こらないか二つに一つです。先程、次郎さんが仰った何が起きても可笑しくない、その為の自衛は怠っては、ダメだと思います。例えば食事もそうだし、トイレやお風呂は、兎角一人で行く機会が多い想うが、誘い会いが必要です。単独行動は避けなければ、いけないと思います」

「ひまり、いい事言うじゃん、自分も気負つけよう」

マキが言う。トマムでR237に出て、富良野を通過し、上富良野を過ぎて右折しR353に入る。二十分ほど走った、白金青い池に到着、ひまりが説明を始めた。

「水面が青く見える不思議な池。十勝岳の防災工事の際、堰堤に溜まるた水が、不思議なほど青い色をたたえ、立ち枯れのカラマツとあいまって幻想的な風景に。いつしか(青い池)と呼ばれるようになりました。

ここは釧路でも多くの人が行き、語っている。立ち枯れたカラマツが、より一層、狂騒的な風景を奏でています。多くの人が皆、神妙な表情

で見つめています」

ひまりの説明に皆は聞き入り、終われば拍手が起きた。ここはお陰様と言うか、モデルお願いしますと、カメラマンは寄ってこなかった。其々にコンデジで写真を撮った、御多分に漏れず、マキは次郎にびったりくっついて撮っている。コーヒーを飲んだり、背伸びをしたりゆったりムードだ。

「さつきから気にかけているんだが、ここには白のセダンはいない。小生の勘違いだったか」

と次郎は言う、皆、銘々に過ごした。

「サア、行こうか」と次郎が言った。

「宿は美瑛にとってある、ペンションUだ、ご夫婦と娘さんの三人で営んでいる、今日は小生達だけと言っていた」

「和食洋食どっち」

とカナが言う。

「何と言うかな、早く言えば和洋折衷と聞いている」
皆はふーんと言った表情をした。

「出立しよう、カーナビにペンションUを入れといてくれ、大通りから入り三回ほど曲がると、と言っていたマキ良いかな」

「よっしゃー！任しときな」

「マキちゃんの威勢のいい声」

とミニの中でひまりが言った。

「早く着いて飲みたいだけだよ」

と、次郎が言うと、ひまりはキョトン顔をした。電信柱のない、作られた街並みを進んだ。BMWは右に左に曲がり、洋館を思わせるような館の前で止まった。マキとカナがことばかりに聞いて来た。フロントウインド越しに、そうだと合図した。オーナーだろう出てきて、次郎達を見るなり、

「ペンションUですが、お間違えないですか」

と聞いて来た。肌思いつきだしルックの女三人に、極端に歳離れの男二人、しかもミニクーパーは並みとしても、BMWのサイドカーに乗った、そんなグループを、オーナーには何と見えたのだろうか、次郎はミニから降りオーナーさんに説明する。

「私は東京から来た谷端次郎です、皆、小生の仲間です。今晚御厄介になります」

と聞いてオーナー納得した。

「東京の谷端様御一行様ですね、車は奥のガレージの、空いている所の停めて下さい」

玄関を大開きにしそのまま奥へ進む。

「お客さんのお着きだぞー」

とオーナーは言った。台所で奥方が出てきて言う、

「こちらですどうぞと二階へ、どの様にご使用なされても構いません」

と言い、洋室二部屋と、和室を一部屋小生等に用意してくれた。

「食事は一階の洋室です。尚、本日は谷端様だけです。お風呂は一階です、5人様一度に入れますが、ご相談の上入浴して下さい、夕食は

7時からです。時間があります、入浴後食事となります。では、その時また」

で、女将さんは階下に、女性陣が先に風呂にたった。皆、身の回り品を、整理していると、

「食事です」

の声が、風呂上がりの匂いをさせながら、階下の食事処、一同あつと声を発した。大きなテーブルに、所狭しに並び料理載った、皿の数々、

「仕上げは美瑛牛のステーキ、飲み物も一通り用意してあります」今風な若女将が言った。

「取敢えず生ビールで行こう、5人分を用意して下さい」

「全員分でいいんですか」

「そうです全員分です」

所狭しと並んだ小皿の間に、グラスは置かれた。

「サアー皆、心置きなく飲んでくれ、持てカンパイが先だ」

乾杯の音が終わると同じしてグラスは、一つ二つ・・・と空き始める。

全員分でいいんですかと言った、若女将の心配事は吹っ飛んだ。

「酔わない内に、明日の予定を言って置く、出立は9時、ここ美瑛は見所は数々あるが、今回はこつから旭川に出て、滝沢から日本一長い直線路を通り、美唄に抜ける。岩見沢で道央自動車道に入る。札幌ジャンクションを左方向へ、苫小牧東IC通り、登別東ICで道央自動車道を降りる。洞爺湖登別線に入り登別温泉へ、距離は262km」

「登別温泉って、♪いい湯だな、♪ビバビバ、あのドリフターズで有名な、登別温泉」

マキが目を輝かせて言う。

「そうだ今宵はその登別温泉泊、時間があれば、三途の川もある登別地獄谷を一回りする」

「ドリフターズが入った温泉、自分も入れる、そんな機会は滅多にない、うーんと楽しんじゃお」

次郎はそんなマキを、ただ眺めるだけだった。

次郎は話す。

「釧路を出て美瑛までは、問題なく来られた。が、この先何が起きても不思議でない。なお一層気を引き締めるように、不審車両はいつ出てくるか分からん。心してドライビング、捜査されたし、飲み物食べ物、たっぷり用意してあると聴いている。体調管理は他に非ず自分にある、では美瑛の夜を楽しんでくれ」

次郎はそう言って自分流に、喜多里の水割りを作った。ケンジと二人は、女性陣のYYキャキャを尻目に、静かに食べ、飲んでいる。

「だけどあの三人は、良く食べ飲むな」

とケンジは珍しく、女性向けにしゃべった。

オーナー夫婦と娘さんが、次郎達のテーブルに来た。

「後は片付け物だけです、ご迷惑でなければ、ご一緒させてください」と奥方が聞いて来た。

「こんな席で宜しかったら、構いませんよどうぞ」

「ありがとうございます。ではと次郎とケンジの前に、腰を下ろした。

「谷端さん、いろんなお客様をお迎えしましたが、谷端さん達のようなお客様は初めてです。加藤茶や中本工事等、年の差婚もあるが、見た感じ既婚者でもなさそうです。ファーストネームで呼び合っている、ではと続き、（仲のいい年の差友）ではなかろうか、こんな私どもの推理です。或いは、丈もあり適度に凹凸もある。セクハラ風をご容赦下さい。ファッション関係の方々かなと、想ってもみた。あなた方は一体、何をなさっているお方様ですか、お話しできる範囲で、お聞かせ下さい」

「ご主人、面白い言い方をしますね、適度に凹凸もあるとは、自分等にはセクハラでも何でもないよ、言うなれば（今年の新語）ではと、誰とはなしに言った。ご主人は次郎風にこつくりを一つ。

「自分は元警部、元警視庁特捜隊員もいます。目的を同じし、集まったそんな五人です、どう捉えようが、これが小生等です。これ以上はご容赦願います」

「谷端さん、お話しくださりありがとうございます。私どもはそれ以上は、お聞きになりません。強いて言うなれば出立時、あのマシーンと一緒に、お嬢さんらの写真も撮らしてください」

「マシーンとは、女将さんも面白い言い方をしますね、たやすい御用です、あの女性陣は、如何にポーズをとるか楽しみにしててください」

「ああもうこんな時間か、ご主人、小生は飲み時間を、2時間と決めてる。小生は床へ、アルコールはたっぷりあると聞いています、女性陣はまだまだ続くと思うが、時間の許す限り飲ましてやって下さい」

「谷端さん心配には及ばぬ、了解しました」

翌朝、次郎とケンジは朝食の為階下に、階段に足を降ろしたら、下から女性陣のＹＹが聞こえてくる。

「次郎にケンジおはよう」

とめいめいに声がする。

「谷端さんおはようございます」

と女将の声がする。次郎はおはようと返した。

「昨晚はご迷惑をお掛けしたのでは」

と女将に言った。

「谷端さん、とんでもございません。マナーが行き届いたお嬢様方です、昨日のうちに飲み会は終わり、なんと谷端さん、洗い物を手伝って頂けました。お酒も強いし何度も言いますが、しっかりしたお嬢様方です」

「そうでしたか」

と次郎は言い、朝食に箸をつけた。頃合いを見て、若女将が魔法瓶に急須と、湯飲み茶わんを持って来た。

「それにしても谷端さん、お強いお嬢様方ですね、喜多里は、3本用意していましたが、空っぽです。5人否3人で、あれだけ飲んだ女性は初めてです。それと私の父が、昨晚からソワソワしている。モデルさん達と写真が撮れる、寝言で言っていたと母が言う。そんな父を見たのは初めてです。面倒ではと思いますが、一緒に写真を撮って下さい」

すかさずマキとカナにひまりはVサイン。9時半、BMWとミニを玄

関前に、適度に角度をつけ並べた。まずは皆で集合写真、後に女性陣はオーナーと個別撮影、次郎とケンジも、女将と若女将との撮影を楽しんだ。通行人も時ならぬ光景に歩を止める。いつくバージョンは更に増した。ひまりの希望でBMWはニケツで行く、パッセンジャーシート使用でBMWは3人乗りだ。

「体重移動はその都度カナが指導する、ひまりはカナに抱き着くようにし、動きはライダーと同じにする、離れてしまうと前後で動きが微妙にズレ、運転しずらくなる。後は、裸同然の若き女性が、3人乗るサイドカー、世の男どもが頼って置く事はない。そう思って乗るように、いわば嫌がらせや等多いと思う。小生等もミニで、監視しているが、何が起こるか小生にも分からん、制限速度を守り交通ルールを守り、走行に徹すべし、不審車両も出てくとも思われる。情報交換は密に、では、ペンションU様にお礼を申し述べ出立」

次郎の掛け声で、BMWとミニ静かに走り出した。美瑛から北上して旭川へ、12号線に入り、深沢あたりで次郎はマキに電話を入れた。「後10k位で滝川市に入る、そこからは20数キロと、日本一の長い直線路が続く、少し早い直線が見渡せる、道の駅でもあったら休憩しよう」

マキから了解と返って来た。と言うのも次郎は、さっきから気になっている、ズーつと後方なれど、例のシルバーのセダンが付いてきている。これだけ離れていたんじゃー、ナンバーも運転者も分からん。速度を落とせば相手も落とすし、上げれば相手も上げてくる。一度停車して様

子を見るしかない、次郎はケンジに言った。相変わらず、BMWを追いつ越しざまに、クラクションを、リズムカルに慣らして行く車が多い。札幌や千歳はどうなる事やら、次郎は余計な心配をした。

「次郎さん、あっしもいるし、マキちゃんとカナちゃんは、そんじよこちらの男どもには負けん、安心してて下さい」

とケンジが言った。

「小生もそう思うが、事故が心配や、事故は思わぬ所でやって来る。ちよつかい出された拍子に、サイドカーは思わぬ方向に行ってしまう、又、他を巻き込むとも限らん。けれど小生が誘い、連れて来た女性だ、ケンジ無視は出来ん、それとなく見張つといてくれ、それらしき行動があれば、ミニを間に入り込ませる」

「よっしゃ」

とケンジは言った。

やがてBMWは道の駅、ハウスヤルビ奈井江へ入った。

「長い直線路だね、ブーツとブーツと先まで続いてる、地球の果てまで見渡せる」

カナが興奮気味に話す。

「ここから見ると、道路が波打っているように見えるだろう。小細工はせず、草原をブルで地べたの表面を掻き、舗装する。そうしてできた道路は、端から見渡せば、波打った様に見えるんだ。ふいに次郎はカメラをとった、後方からくる白のセダンに、ピントを合わせ、辛うじて運転者が確認できる。

「マキ、この写真を三鷹署一課長に送って、前科者リストを確認してくれ、

いっぷくにある小生のPCから、例の六本木ビルの住人がいないかもだ、マキ至急だ」

マキはスマホを弄り出し、画像を送信する。

「次郎、父っ様に送ったがいつ戻って来るかは、分かんないよ」

「三鷹署では捜査一課長だ、父上をそんな言い方しちゃう遺憾よ」

次郎の不意を突いた言い方に、マキはしゅんとす。ケンジが人数分んの、缶コーヒー買って来た。

「さっきの白いセダンは、今迄付いて来た車の一台に相違ない。だけど、何処にいて何処から付いて来たのだろうか」

次郎は缶コーヒー、一口二口飲みながらボソボソと言った。あつ次郎さんとひまりが発した。

「十津川警部の推理には二つある、一つは一般的な考えだが、気が掴ん場所で動きを監視している、もう一つは発信機だ次郎さん、車の中と言わず下から全てを、目視でいいから小型発信機を確認して」

話が終わん内にひまりはミニの下に潜った。次郎にケンジも続きマキにカナも続いた。5分とせん内にカナが、BMWのドライブシャフトの、付け根付近から、5cm四方の黒い物体を見つけた。

ミニにも付いているぞ探そう、全員で車の下へ潜った。休息をとっている他のドライバーさん達が、異様な光景に見えたのだろうか、如何なされましかかと、声を掛けて来た。

「いやー、下の小ねじが緩んでいるんだろか、異音がするんですが見つからない、もう終わりにするところです」

次郎は言い下から出て来た。次郎は、ポッケからBMWで見つけたと同じ、黒いボックスを出した。

「白のセダンの奴め、二つも発信機をセットしやがつて」

「次郎さん、今度はそれを自分等で使いましょう。どう、何処で使おうか、」
「十津川警部の助手さんにあっちゃー、叶わんな、高速道路上は事故を招くとも限らん、そうだ、今日の宿泊地登別温泉にしよう」

「第一滝本館がいいよ今迄、宿泊は次郎に任せっぱなしだったが、登別温泉はここにして下さい」

マキにカナが言う。追っかけひまりが付け加えた。

「ドリフターズでも名高い、登別温泉は、第一滝本館が良いと聞いている。自分もここを推薦します」

「女性陣の希望ではここに決めるしかない」

次郎はケンジの顔を見た、ケンジはそうだと云わんばかり。

「宿は決まったな、室蘭署に電話を入れ協力を、頼んでおこう」

次郎はスマホをプウシュした、室蘭署ですと、スピーカーホンから応答の声がした。

「東京の谷端次郎です、谷川警部さんはお手すきでしょうか、空いていましたら、電話口へお願いします」

はい、お待ち下さいと保留音が、僅か間は空いたが、

「おっ次郎さん俺だよ、暫くです谷川です」

と返って来た。

「所で次郎さん今何処からかけている」

「道央道岩見沢付近です」

「北海道に來ているんですか、何用で、まりさんと旅行ですか」

「いやーそうじゃないんだ、警察手帳も拳銃もない捜査です」

「えっ捜査と言ったね、どんな捜査」

「知っているだろう、函館で東都地検職員が銃殺されたのを、それと関連があるともいえる、釧路空港の毒殺事件と、漁船の岸壁激突炎上事件、ひよんな事から、被害者さん家族から、真実と真相究明を委託された。捜査するに連れ、不動産不当取引、薬物、拳銃売買、裏金等、東都地検絡みともとれる。しかし物証は何一つとしてない、そんな訳で何か手掛かりになるような物はないか、北海道に來ました」

「その事件はここでも話題になっている、物的証拠がないと言っている。で、何か掴みましたか」

「ちらほら出るには出ているんだが、確証がないんだ」

「で、次郎さん今日はどうしました」

「懐かしかなり話してしまった、本題に入る。小生等は監視され、嫌がらせを受けている。摩周湖から屈沙羅湖への下りでは、カーバトルに巻き込まれ、昨日は白の不審車が後の先に、今日は発信器が車の下から見つかった。紛れもなく小生等の動きを監視している。と言ったところで谷川警部さん、お願いだ、小生等に力を貸して欲しい」

「構わんが、何を如何すれば良い」

「今度はその発信器を小生等が使う」

谷川警部は合点がいかず、あれれっと言った表情が伝わって來た。

「その発信機を使って、サイドカーとミニで、道南バス登別温泉ターミナル先、彌生橋へ誘う出す。橋上で挟み撃ちです、不審車両乗車員は、拳銃携行も考えられ、如何様に小生等を狙うのか真実が知りたい。その事が射殺、毒殺に繋がると思う。挟み撃ちの時間は多分、午後三時頃と思うが、追って連絡します」

「了解、だけど次郎さん達は何名ですか」

「BMWのサイドカーと、ミニの二台で総勢五名です」

「ほほー、大所帯ですね、後ほど確定時間をお願いします」

で、谷川警部との電話は切れた。終わって、すぐ喋ったのは他でもないひまりだ。

「あの十津川警部だって、他の警察署の警部を、電話で一本で、指図するなんて出来っこない。それを次郎さんは、難なく終わらせる、十津川警部も真っ青だよ」

誉め言葉は次郎の苦手の一つ、トイレへ行ってくると言い、その場を発った。

「ひまり、次郎さんはなー」

とケンジがひまりに言い出した。

「上級試験にもパス出来る実力の持ち主、それが上司の命令に、背いての自分勝手な捜査ばかり、しかしだなー、難事件を含め担当の事件の、お宮入は皆無、上司は、渋々次郎さんを認めざるを得なかった。しかしそんな官僚との衝突があり、進級試験に嫌気がさし一切パス、従い警部止まり。上司にはきつく部下には甘い、又同僚も部下も差別なく、タメ口は一切ない。そんな

訳で、次郎さん達のグループの士気は上がりっぱなし、従い検挙率も上がった。あつ次郎さんが戻って来る、話は終わりだ」

「ふーん、だから退職された次郎さんだけど、慕っている人が多いんだね。ましてや他府県でも」

くしゃみをしながら次郎は戻った。

「誰か俺の噂してたんだろう」

って言った。皆其々にとんでもございませんと誤魔化し笑いをする。

「サアー行くとすつか、発信機はミニに置いておく、不審車は何処で出てくるかな、出てくるなら出てこいだ。高速道はスピードは出ている、接触でも大事故となる。気を引き締めて登別温泉を目指せ、昼食は時間になったら最寄りのSAへ入るように、いざ出陣」

そんな次郎の言い草に皆は素直に言った。

「はい、畏まりました」

一行は岩見沢ICで道央自動車に入った。札幌、苫小牧と、大きな嫌がらせもなく、皆はツーリングを楽しんでいる。樽前SAで昼食タイムをとる。ルパン三世が喚く、水上一課長からだ。

「あつ一課長さんお忙しい所、写真の結果は如何でしたか」

「前歴者カードではヒット無かったが、六本木ビル前で撮った写真には写っている、二瓶企画の社員の一人だ」

「ありがとう、小生等に度々嫌がらせをしてくる、その一人だ。リスク大だが着実に外堀を埋めかかっている。マキちゃんをもう少しお借ります」「次郎さんなら良く言う事は聞くとと思う、存分使ってやってくれ」

次郎は谷川警部に電話を入れた。

「警部、次郎です小生等に付きまとう不審車の一人は、東京は六本木の二瓶企画の一員です。今小生等は樽前SAで、昼食をとりながら時間調整うしています。三時きっかりに、倶多楽湖公園線から弥生橋に入り、出口辺りで止まり塞ぐ、谷川警部さん等は直ぐ後を追い、弥生橋で挟み撃ち、と小生流にシナリオを描いてみた、拳銃所持も考えられる、注意して下さい。「いいでしょう、我々も遅れん様、時間をみはらかつて追いかけます。では橋の上で」

そうこう谷川警部と確認とおったら、又もやルパン三世が喚いた。スマホ取った。

「おつ、理沙からだ、何か東都地検で動きがあつたのかな」と言いながら次郎ですと言った。

「私理沙です、今何処、美味しい物ばかり食べてんのと違う」

「おいおい、小生等は重要な任務でここに来ている、旨いもんなど、食べる余裕はない」

「ふーんだ、帰ってきたらマキちゃんカナちゃんに、聞いてみようつと」「理沙、何か連絡事項があるんでは」

「あっいけない、言いそこなうとこだった、室長さんが、一週間の予定で休暇を取っていたんだが、昨日の昼頃出勤し、思ったより仕事が早く終わったんで、今日から出勤ですと言った。可笑しいと思わない、どこでどんな仕事をしていたかは不明ですが、一週間の予定が、四日も残して返って来た。いくら仕事が早いとは言え、何か変だよね次郎、そう想わない」

「うーん、小生には良く分からん、取敢えず連絡してくれてありがとう」
「次郎、諸物価値上がりの折、土産探しも難しいと思うが、スペシャルギフトをお願いします、以上」

「了解、その後何か地検で動きがあったら連絡してくれ」

理沙からの電話が終わると、皆に向き直り言い出した。

「村井瑠璃子秘書室長の休暇は終わった、昨日から出勤していると言う。屈沙羅湖で華々しく、ダイブした男に走行妨害を指示した女は、村井瑠璃子ではないのか、そうだとしたなら、走行妨害に失敗し事情聴取で、指示等詳細が判明し名等、判明してしまう。取り急ぎ北海道を離れたのではないか、後は二瓶企画に指示し本人は東京へ戻った。そんな小生の推理や、何かあったら聞こう」

ケンジが言った。

「と言う事は、これからの走行妨害等は、二瓶企画だけでやって来る、男だけどとより一層厳しいのでは」

「そう想っていてくれ、遊び半分な運転や行動は、命とりと言っても過言でない」

次郎の言に、皆は言葉少なく、厳しい表情になる。次郎のスマホは、谷川警部と繋ぎっぱなしになっている。

「小生等は今、登別東ICを下りた、倶多楽湖公園線に入った。先程より白の不審車両は付いて来ている。こっちの策略にはまったな、もう直ぐひっつかまてやる、待っていない」

「次郎さん、こっちは覆面パトカー二台だ、白の不審車が前方で、見え隠れ

しながら進むのが見える。後、極楽通り弥生橋先に数人だが、警察官を配置してある。

「ありがとう、不審車には二名乗車している、辛うじて人相なんだが、一人は二瓶企画の様だ。後五分で弥生橋だ、倶多楽湖公園線から入る」

「了解」と谷川警部の声、

「マキ、弥生橋の出口付近でとうせんぼ宜しく、BMWとミニを止める、止めたらミニの陰に隠れろ」

マキも「了解」と返って来た。

「サアー行くぞ」

BMWとミニは、白の不審車をとうせんぼした。この野郎とばかりに、男二人が降りてきて、罵声を飛ばす。覆面パトカーが音もなく、男たちの背後に止まる。男一人拳銃を取り出し、警察官に言った。

「それ以上近づくと、ぶっ放すぞ」

と意気込んだ時、カナが低い姿勢から足をけり出し、クロヒョウ宜しく男の足元に駆け寄り、拳銃をけり上げた。拳銃は空を舞いマキの手元に収まる。思わず強っえーと、ひまりと谷川警部はハモった。その後男二人は暴れはしたが、取り押さえられ室蘭警察署に連行される。あっという間の出来事だった。谷川警部は言う。

「調書をとらせて下さい、ご足労でも室蘭警察署までお越し下さい、コーヒー位なら出せます」

その一言で女性陣は、緊張が溶けたかヤッターと氣勢が上がった。

「はい了解、二人の取り調べは谷川警部さんにお任せします。その間、コー

ヒー飲んでていいのかな」

「本日は、次郎さん達は調書をとられる側です。言わば、警察官の質問に答える側です」

それを聞いていた女性陣からブーイング。

「何故、自分達が調べられなければならないの」

マキがお冠気味に言った。

「次郎さんもご存じと想います、犯罪に調書は必要です、本管が作成します、その作成に協力して下さいと言っているんです。ご理解を賜りたい」「マキ、谷川警部さんも仰っているだ、協力してやってくれ」

マキは次郎の言に、はい。取り調べは十分と掛からず終わった、コーヒー冷めちゃう頂こう、女性陣は元に戻ったようだ。谷川警部さんがコーヒーのお代わりを、婦警さんに頼んだ。谷川警部もひと段落して、落ち着いたのか廻りが、良く見える様になったようだ。

「それにしても次郎さん、助手さん否、お仲間と言うかべきか、女性陣の容姿は適度に凹凸があり、プロポーションは素晴らしい。あいやセクハラになっちゃうな、次郎さんよろしくね、訴え聞いてんと、はたまた武術の素晴らしい事、弥生橋での咄嗟の立ち回り、内の若い衆には出来ん事です」「警部も普通の男性ですね」

と、次郎は言い、今度は女性陣に言った。

「警部さんから、プロポーション、よろしくとお褒めの言葉を頂いた。お礼の言葉は」

マキとカナが、セクシー風にポーズしたり、モデルウォーク。コーヒー運ん

できた婦警さんは、カップを落としそうになり、眼を白黒させた。事情を知った婦警さんは、女性陣に交じりYY始める。

「次郎さんは幸せもんです、この様な女性さん達と、捜査出来るなんて」

「谷川警部さん」

とマキが声かけた。

「谷川警部さんも、次郎と一緒に仕事してたんなら、知っているでしょう。

同僚や下には優しく、上司には厳しくです。捜査は自分勝手、そんな訳で解雇寸前まで行っちゃいました」

「その頃、本管も一緒に仕事していたかな」

と谷川警部が言う。

「だけど皆なの士気は上がった、どっかで言ったかな、携わった事件は即全て解決、誰もが認めた警部であつた。今でも慕いつつ、訪ねて来る警察官は多い。そんな次郎さんだから、自分等も就いて行くんです」

「武術は立派なものをお持ちでは」

の警部の問に次郎が答えた。

「マキは幼稚園の先生で、村上水軍の末柄、祖父さんが水軍を引き継ぎ、北野流道場を開いていてマキはその師範、父親は三鷹署の捜査一課長。

カナの本職はケーキの職人さんで男でも挫折が多々の、厳しい警視庁特殊隊員の資格を取った。英語、ドイツ語を話し射撃はトップクラス、ライフルに關しては右に出る者はいない。武術は早朝毎日欠かさず、壁を駆け上り、低姿勢で駆け回り、空中を飛びまわり、蹴りは強烈。スカウトしチームいっぶくに加わった。ケンジは元柔道のオリンピックチャンピオン、本職はガードマ

ンだが彼もチームいっぶくに加わってもらった。以上だ何か質問は」

「まりさんは、チームいっぶくではどんな立場」

と警部が聞いた。

「コーヒー屋さんだが、チームのまとめ役と言ったところ」

「そうだな、次郎さんじゃーどっちへ跳ぶか知れたもんじゃーない、まりさんに確りと締めといってもらわんとな」

「谷川警部、そりゃーどういう事か」

「あつ、遺憾聞こえてしまったか、独り言のつもりで言ったんだが」

皆は腹で笑うのが苦手と見え、苦しいを連発。そんなこんな室蘭署内の応接室、次郎さんと谷川警部は向き直った。

「二人の男は以前として黙秘している。今日中は無理、詳細は何時になるかわかんない、どうだろう次郎さん、予定もある事だろう、取り調べが終わり次第FAXするでは」

「ありがとうそうしてくれる」

明日、明後日は函館にいる、その次は八戸だと想う、何処の署でもいい完了次第送ってくれ」

「了解そうする、次郎さんだろう、俺の退職後は東京に行く、チームいっぶくで使ってくれまいか」

次郎は突然の警部の言に戸惑った。皆の視線が自然と次郎に向いた、少しおいて徐に喋りはじめた。

「谷川警部さんの経験と知識は確かなもんだ。小生は欲しい、だが、無職では採用できん」

皆は何でーと言った表情を浮かべた。

「チームいっぷくは仕事を持ちが、活動するために、自由に休暇が取れなければならぬ、警部もご存じの通り皆、仕事を持っている。何故仕事持ちでなければならぬか、簡単だ出張費は別だが給料が払えん、警部、分かってくれ小生の台所事情を、勝俣、武術堪能でなければならぬ、そのへんは警察官よってクリアできる。休暇が割と自由に取れなければならぬ。ここにいる皆は、事ある毎に招集をかけ集まっている。そのへんもクリア条件の一つ」

それを聞いていたヒマリがソワソワしだした。

「ヒマリちゃん、言いたい事があるんでしょ、いい機会だよ、何でも言って」とカナが助け船を出した。ヒマリは冷たくなったコーヒーをのんだり、落ちて着かん。又もやカナが助け舟、

「次郎、ヒマリちゃんが聞いて欲しいって、言ってるのが分かんないの」

次郎は、はてなマークでヒマリに向き問た。

「何でも聞こう」

賺さずカナが言う。

「ヒマちゃんチャンスだよ、頑張って」

「小生に何か聞きたいのか、何か言いたいのかどっちだ」

「どっちでもない、チームいっぷくに入れて下さい」

それには次郎も慌てたが、気を取り直して言った。

「チームいっぷくの規約はないが、仕事持ちでなければならぬ、それで言わば給料はなしだ、招集が掛かれば、有無を言わず集合、武術を身に着けた武闘家が望ましい。ヒマリ、当てはまるは幾つあるかな、その辺を考慮し考

え直してみては」

「次郎、無茶言うなよ、今迄ヒマちゃんを見ていただろ、武術は落第を認めるが他は優マークだ、自分は合格点だ」

とマキが言った、カナもケンジも、指で丸を作った。

「ヒマリ、結論は今日は出せん、預かりとして置く」